
気になる師匠が閑静な住宅街で全裸になった

澤群 キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気になる師匠が閑静な住宅街で全裸になった

【Nコード】

N5066Y

【作者名】

澤群 キヨウ

【あらすじ】

暑い夏の帰り道、僕は師匠に出会った。情けなくてだらしなくて、だけど愛すべきおっさん。これは僕と師匠の、二十歳も差がある二人の不思議な友情の物語。

中編・不定期更新

出会い

僕はその光景をただただ、黙ってみていた。

額から血を流した師匠が、手錠をかけられてパトカーに押し込まれていく。

足が一步だけ、前に出る。唇が震えて、声を出すことはできなかつた。

(師匠……、師匠……！)

僕は師匠の名前を知らない。苗字が、多分、山城さんなんじゃないかな、くらいにしか知らない。

(師匠……！)

*

僕と師匠の出会いは、ちょうど一年前のこと。

通っている小学校は築四十年近いボロいもので、当然ながらプールもボロい。プールサイドで散々日光に晒されて、日焼け止めなんかまるで意味がないと思えるコンガリ感にうんざりしながら帰り道を歩いていたら、声がかかったんだ。

「よう、少年！ プールか？」

それがどこからした声なのか、僕はキョロキョロと辺りを見回した。そして、道路右手にあるオンボロアパートの2階の窓辺でタバ

コをフカしている中年が発生源なんだと特定し、無視を決め込んで再び、家に向かって歩いた。

「無視かよ！ 今の小学生はなつてねえなあ！」

無遠慮に斜め上後方から罵られて、もちろんちよつと腹がたつたけど、振り返らずに歩いた。危ないオッサンの相手なんかしたら危ないから。

次の日もプールだった。先生に出席のスタンプを押しもらったプールカードを眺めながら一人、家に向かって歩いていたら、声がした。

「よう、少年！ 勤勉だな。今日もプールがご苦労さん！」

リズムカルに楽しそうに、その中年は笑顔で声をかけてきた。今日はタバコではなくて、凍らせて吸うタイプの細長いアイスを手にかけている。

「一緒にどうだ？」

小学生は知らない人の誘いに、そう簡単にはのらない。そういう風に大人が教えてくるから。

知らない人から物をもらってはいけない。

知らない人についていったらいけない。

「なあ！」

だから僕は無視をした。当然だ。プール帰りの小学生をアイスでつろうなんて、なにか邪まな考えをしている人に違いない。たまには男の子が好きな変な人もいるって、聞いたことがあるし。何をすめるのかは知らないけど、きつとおぞましいことなんだろうと思う。そんな体験はまっぴらごめんだ。

「少年！」

上からかかる声を避けるようにして、僕は身を低くして走った。

土日を挟んで、月曜日はまたプールだった。憂鬱な気分で、ただお母さんに心配をかけたくないから笑顔で家を出る。それでバシヤバシヤ泳いで、先生の話の間は日差しに焼かれてもう真つ黒になったみんなの背中を見ながら過ごして、またバシヤバシヤして。

今日も一人で家に帰る。友達がわいわいと連れ立って帰るのを見送って、最後の一人になってから学校を出た。

「よう！ もう真つ黒だなー、小学生！」

懲りずにまた、声をかけられた。その時思ったのは、僕も懲りてないなっということ。変なおじさんに声をかけられたくなければ他の道を行けばよかったのに。なんとなく土日挟んで時間が空いていたから、もう諦めているだろうとか、普通の会社勤めならいない時間帯だからいないんじゃないかとか、そういう楽観的な事を考えていたんだなっ。

「暑かったろう。毎日頑張る君に、ご褒美を用意している！」

しかも今日は窓からではなくて、道のど真ん中で待っていた。あの辺りにパラパラとひげが生えていて、髪は暑苦しく肩の辺りまで伸びていてすごくだらしない。着ているTシャツはよれよれだし、下はハーフパンツ一丁。この格好で外に出ていいのは、誰の目にもつかないようにササッと出る、朝のゴミ出しの時間だけだと思う。

僕はちよつと悩んだ。どうやって避けようかって。来た道に戻るか、おじさんの横をすり抜けていくか。

「アイスだ。先週のは安かったからイヤだったんだらう？ 本日はこれを用意したぞ！」

おじさんは丸いカップのアイスをドーンと前に突き出してきた。有名なメーカーの、年中売ってるバニラ味のアイスクリームだ。この炎天下で僕が通るのをずっと待ち構えていたのだとしたら、あの

中身は多分もう液状になっているだろう。案の定、突き出したアイスのカップは汗だくになって、ポタポタと水滴を地面に落としている。あれをもう一度冷凍庫に入れれば固まりはするけど、シャーベツトみたいにシャリシャリになってしまつて、滑らかさも美味しさも損なわれているアイスではない別な何かが出来上がる。一度やったことがあるから、知ってる。

「すみません、いりません」

小声で手早く答え、すり抜けようとしたんだけれど。

「好みではなかったかな？ 一応冷凍庫に、チョコレート味も用意しているぞ」

おじさんはニカツと笑顔で、とおせんぼしてきた。やっぱり、回れ右、したほうがいいのか。

「失礼します」

振り返つて、一気に走ろうと思った。けど、手を掴まれてしまった。

「待ってくれ」

お母さんに持たされた防犯ブザーはランドセルにつけばなしだ。もし周囲にこの危機を知らせたいのなら、叫ぶ必要がある。できるか、僕に。誰か助けてください！ 変質者です！ って大声をあげられるか？

「少年、俺に協力して欲しいんだ。けつして怪しい者ではない！」

「怪しいじゃないですか」

掴んだ手は離さないし、まず最初に物で吊ろうとしてきた。そんなやり方をしてくる大人に警戒しないのはよっぽどめでたいチビっこだけだと思う。

「俺はライターをやってるんだ。シナリオ書いてんの。で、今の男子小学生のリアルな心情を知りたいんだよ」

「ライター？」

火をつけるもの、ではないって、少ししてから気がついた。物を

書く人だ。シナリオを書いている。なるほど。だけど、やっぱり見ず知らずの小学生に声をかける方法としては今のやり方は非常識過ぎて、頭から信じることはできそうにない。

「すみませんけど」

「頼む！ 少年は俺のイメージにピッタリなんだ。小学校の前で随分探したんだけど、少年が一番だったんだよ。だからさ、話だけでも聞いてくれないか？」

結局しつこさに根負けして、僕はおじさんの部屋に通されていた。いつでも逃げられるようにと、おじさんは笑いながら僕をドア側に座らせて、しかもドアは開けっ放しにしてくれた。

部屋の中はクーラーがそもそも設置されていなくて、蒸し暑い空気を扇風機が散らしているだけ。

蝉の鳴き声がこれでもかかっていうくらい大きな音で聞こえてくる中、スツとアイス差し出された。

「こっちは俺が後で食べるわ」

さっきまで炎天下で溶かされていたバニラ味は冷凍庫にしまわれて、僕の前には、バニラと同じメーカーのチョコアイスとプラスチックのスプーン。

「暑いだろ？ 遠慮なく食べてくれ！」

「……頂きます」

カップのふたを開けて僕がアイスを口に入れると、おじさんは満足そうに笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5066y/>

気になる師匠が閑静な住宅街で全裸になった

2011年11月24日19時53分発行